



○「非認知能力」

テストなどで数値化できる認知能力とは違い、非認知能力とは、積極性やリーダー性、自己や他者を理解する力、自分自身の感情を統制するセルフマネジメント力といった数値では図りにくい能力のことを言います。



学力の3要素、つまり「基礎的な知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等の能力」、「主体的に学習に取り組む態度」のうち、「思考力・判断力・表現力等の能力」は「基礎的な知識・技能」と違って見えにくい学力、「主体的に学習に取り組む態度」は見えない学力とも言われていて、非認知能力的な学力とも言えます。高校入試や大学受験（共通テスト）において「思考力・判断力・表現力等」が問われるようになってきています。また、入試の面接などでは「主体的に学習に取り組む態度」も見られています。

8月に仙台育英高校の野球部須江監督の講演を聞く機会がありました。「非認知能力が高いと成功しやすい。自己理解する力、自分自身を客観的に見ることが出来るメタ認知力、やりぬく力、忍耐力、意欲・・・これらは主体性がないと養えない力である。つまり目的や目標を持っているなことに挑戦することで養っていく力でもある。挑戦するということは失敗するということ。失敗から人は学び成長する。だから指導者や親は、自ら挑戦する姿を子どもにみせることが大事。人生は敗者復活戦。大切なことは挫折との向き合い方。失敗すれば自己肯定感が下がるものだが、そこが指導者の腕のみせどころ。なぜ失敗したか自己肯定感が下がらないように丁寧に説明することや叱らないといけな場合でも上手に叱り終えることが大事。人はネガティブなことは頭に残りやすい・・・でも結局最後は本人の気合や根性」、そのような話だったと思います。

最後に成功に導いてくれるのは誰でもなく自分自身であり、そのためにも非認知能力を高めることが大事であるということだと思えます。

カーネル・サンダースさんは、65歳でケンタッキーフライドチキンの売り込みをはじめ、1009回も交渉した相手に断られたそうです。それでもあきらめずに売り込みを続けた結果、少しずつ取扱う店が増えていき、フランチャイズ（FC）ビジネスとして成功させました。彼の言葉を借りれば「失敗とは、再始動したり、新しいことを試したりするために与えられたチャンス」だそうです。人生は敗者復活戦の連続であり、彼を駆り立て続けたのは非認知能力の高さだと思えます。

2年生が行くTDLの創業者ウォルト・ディズニーも失業や起業しては倒産を数度経験しています。彼もまた「夢を見ることが出来るなら、それは実現できる。」と言っています。

仙台育成高校野球部のスローガンに「日本一からの招待」というのがあります。日本一になるチームづくりでなく、日本一から招かれる人づくり、チームづくりをしようということ。須江監督の培いたいのは、素直で粘り強く、やりぬく力があり、慢心せずおごらない選手・・・言い方を変えれば、非認知能力を高めることで日本一をめざすとも言えるのではないのでしょうか。